京都大学 大学院教育学研究科／教育学部

News Letter
Graduate School of Education

巻頭言　矢野 智司　副研究科長　❷

研究ノート　❸
- 教員から　岡邊　健　教育社会学講座 准教授
- 院生から　森　七恵　臨床教育学講座 修士課程1年
- 社会人院生から　仲倉 高広　臨床実践指導学講座 博士後期課程3年
- 留学生から　包　福升　教育学講座 修士課程1年

活動報告　❺
- 臨床教育実践研究センターから
  千葉 友里香　附属臨床教育実践研究センター 特定助教
- 教育実践コラボレーション・センターから
  服部 憲児　比較教育政策学講座 准教授

E.FORUMから　❻
西岡 加名恵　教育方法学講座 教授

トピックス　❼
- 大学院教育学研究科教育学環専攻の誕生
  楠見　孝　副研究科長
- 教育学研究科・教育学部における公認心理師養成について
  松下 姫歌　臨床心理実践学講座 准教授

若手研究者出版助成事業　❽

平成29年度教育学研究科長賞　❾
柳岡 開地　教育認知心理学講座 博士後期課程2年

オープンキャンパス2017　❿
大学院・学部学士入学 入試説明会

事務室から　靭　尚子　総務掛長　⓫
図書室から　飯田 智子　図書掛長

諸記録　⓬
①おもな出来事　②人事異動　③外部資金受入　④教育学研究科・教育学部基金

諸報　⓮
- 新任教員・事務職員紹介

京都大学 大学院教育学研究科ロゴマーク

このロゴマークは、京都大学学術情報メディアセンターの客員教授・奥村昭夫先生のデザインです。奥村先生は、ロート製薬、グリコ、牛乳石鹸などのロゴマークやパッケージなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。本研究科・学部の「育ち」「つながり」「先端」といったキーコンセプトをもとに、教育学部本館の正面玄関を見守るクスノキの葉をモチーフとし、緑のグラデーションで成長の変化、中央の空間でこれから生まれてくるものを表わし、全体として両手で優しく包み込むイメージのデザインとなっています。

No.35
2017.12

巻頭言

世界市民とグローバル人材

副研究科長 矢野 智司

経済のグローバリゼーションによって、商品と情報そして人の交通は境界をのり超えて、それまで疎遠であった地域の間を、網の目のように互いを結びあわせている。何千キロも離れたそれまで名前も知らなかった外国の都市でおこった出来事も、ほぼ同時刻のうちに知ることができるようになった。世界は無数の絆で緊密につながり、私たちはローカルな歴史ではなく、グローバルな世界史のなかに生きていることを、日々実感するようになった。

同時に、私たちの生きている世界は、これまでにない規模での予測不可能なリスクにさらされてもいる。ローカルな場所でおこった、これまでなら局所的な出来事で終るものが、因果の連鎖によって、私たちの生活に深刻な打撃をあたえることになるかもしれないからだ。戦争やテロリズムやパンデミック、金融危機や経済格差や地球環境の悪化のように、危機の規模もまたグローバルであって、数十億の人類とともに私たちは同じ運命の下に生きている。可能性としての「人類の死滅」は、SF作家の脳内でのフィクションではなくなっている。

しかし、この絶対的な破局を前にすることで人類の連帯の必要性と可能性を捉えることにもなる。主権国家の利害調整では解決ができない事態が出現していることのうちに、国民国家の主権を留保する世界共和国の建設と、それを担う世界市民の形成という、政治と教育の新たな課題実現の必要性と可能性とを見ることになる。

これまで日本の教育を駆動してきた力は、国民形成と経済発展のための人材養成に向けられた実用的な要請だけではない。過去からの声と未来からの倫理的な声もまた教育を駆動してきた。戦争という破局を体験した敗戦後では、戦争犠牲者たちへの思いが教育関係者の心を強く動かした。死者たちの声が教育を動かしたといってよい。「教育基本法」では、「世界の平和と人類の福祉」に貢献しようと決意し、それを教育によって実現すると宣言していた。いまは、こうした世界市民主義と結びついた死者たちの声は、聴き取ることがとても難しくなっている。

それにかわり、未来からの声は、過去の破局を体験していない私たちにも聞こえる。未来からの声は、未だ生まれてはいない子どもたちからの声である。

いつか死ぬことが運命づけられている私たちにとって、生きているこの世界は、新たな人の到来なしにはやがては無に帰して消滅してしまう世界だ。私たちの生を象る意味や価値は、それらを受け継ぐ者の新たな誕生によって支えられている。私たちは、過去の名も知らぬ「多くの誰か」の存在なしにはいまここに存在しえないのだが、これから未来に生まれて来るであろう未だ名をもたない子どもの誕生なしには、いまここでの生の意味も価値ももちえない。つまり一人の子どもの誕生は、新たなはじまりを可能にするとともに、時の連続性をも可能とする、私たちの現在の生を深部へとつらぬく決定的な出来事なのだ。

このこれから生まれてくる新しい命への歓待は教育的思考を強く促す。教育的思考とは、子どもという新たな生のはじまりをたすけ、新たな生がはじまるこの世界の存続を肯定することにほかならない。この世界の存続を認めるということは、現状から判断して、未来の破局を回避するために、国民国家のうちにとどまることなく世界共和国という理念を目指すことを意味する。

過去と未来の両端の破局にかかわる、不在の他者からの二つの声は、人が「個人」として、そして「市民」として、あるいは「国民」としてあるだけでは十分ではなく、同時に「世界市民」でもなければならないことを要請している。世界市民の形成が不可欠であることを示している。二つの破局、かつて起こした破局とこれから起こりうる破局、この二つの破局に挟まれて、教育関係者は死者を弔いつつ、新たな参入者を歓待し、明日に向けて世界市民を形成しなくてはならない。

「グローバル人材」がたんに経済的有能性にとどまらず、世界市民のように人類の理念を担うことが求められている。そして、私は京都大学が「世界市民形成の世界大学ランキング」（残念ながらこのようなランキングはいまはない）で、トップクラスの大学に仲間入りをすることを願うのだ。

教員から

恐るべき子どもたち？

教育社会学講座
准教授
岡邊　健

主として非行の実態に目を向けた研究に従事してきた。一方で、人々の抱く少年非行観、非行少年観にも興味をそそられ続けてきた（社会学を学んだ者のハビトゥスだろう）。私のみるところ、少なくとも「非行情勢は今が最悪」という基底的認識についていえば、少年非行観は、長期的にみてほとんど揺らぐことがなかった。以下、朝日新聞1面コラム「天声人語」を素材にみてみる（原文の漢数字は算用数字に直した）。

新潟で起きた高校生による殺人事件に触れた2000年5月5日付コラム【……この事件の輪郭は愛知県豊川市で起こった高校3年生（17）による主婦（64）殺人事件に驚くほど似ている。……符合する2つの事件には、「いま」という時代・社会が、重苦しい影をたしかに落としている。】のように、重大事件に言及したうえで「悪質なる現代の非行」を強調するのが、少年犯罪報道の典型的な語り口だ。論調は微妙に異なるものの、このパターンはかなり長期にわたり反復されてきた。【島根県で、中学3年の男の子がスキー競技の好敵手である友人をナイフで刺し殺した。……ドキッとするような異常さが、今は子どもたちの周囲に、ひそんでいる。……】――これは1972年12月5日のコラムだ。公式統計をみれば、この時期は凶悪・粗暴な非行の急減期にあたる。【……日本の10代の一部は近ごろどうかしたんじゃないかと思われるほどの、はげしさだ。……“恐るべき子ども”たちは、無軌道で衝動的な犯罪や事件をやってのける。……】――こちらは1961年9月25日のコラムである。やはり語り口は同型だ。

非行は繰り返し社会問題化されてきた。例外的な事件に基づいて形成される「今が最悪」という非行観は、社会問題化の重要な燃料だったのだろう。ただ、歪んだ認識をもとに出される処方箋は危うい。誤った非行観との抱き合わせではない形で、「非行はたしかに対処すべき社会問題である」との真っ当なオピニオンを広げることはできないものだろうか。

院生から

学部生から院生へ

臨床教育学講座
修士課程1年
森　七恵

今年の春、大学院に進学しました。学部入学前にはぼんやりと教育心理学をやろうかな、と思っていた私が今の講座にいるのは、“気づいたら”という表現が一番しっくりきます。

昨年は、“気づいたら”卒論一色でした。『存在と時間』邦訳全四分冊をはじめ、思い荷物に肩を痛めながら電車に乗り、学内では図書館をめぐりました。当時の日課は、ラジオ体操。肩をほぐすためです。

そんな私なので、大学院に入って、自分のロッカーがあることに心動かされました。大学生活と、どこか根無し草的な感覚とは、ぴたっとくっついていたので、「いってらっしゃい」「おかえりなさい」と言ってもらえる研究室に身を置くのは、不思議な心地です。学部から院へ上がる。陸続きのようですが、ほんのささいな、でも私にとっては大切な、変化がありました。

それでも研究は、陸続きです。学部時代の“気づいたら”からの陸続き。なんでハイデガーなの？何をやっているの？と聞かれると、いつももどかしい思いをします。何をするにもはっきりしない私をここまで連れてきてくれた、この“気づいたら”。その何たるかを、徐々に、探っていくことが求められているのかなと思います。

私の研究テーマは「共同存在」ですが、このテーマと共に「自己」と言われるものへの関心がどんどん深まっています。人間存在（現存在）の実存がいつもそれと共に語れられる「自己」とは、何を指しているのだろう。他者との関係を考えようと共同存在に着手した自分が、「自己」に惹かれていくのはおもしろいな、と思います。

研究していると、自分はこんなことに興味があったのか、こんなことを考えたかったのか、と驚くときがあります。とても楽しい瞬間です。研究しながら、それとは知らずいつも、“気づいたら”の正体探しをしているのかもしれません。気づいたら、ここにいた。気づいたら、研究に熱中している。もどかしい思いをしつつも、まだしばらくは身を任せ、辛抱強く、私の“気づいたら”に付き合っていきたいなと思います。

社会人院生から

現場と研究の交差と場から問い続ける

臨床実践指導学講座
博士後期課程3年
仲倉 高広

臨床実践指導学講座の院生は，さまざまな心理臨床の職域・地域から集まって構成されています。心理臨床の活動と研究を往還させながら，心理臨床とは何か，心理臨床の実践指導とはどのようなものかを研究する講座です。実践の報告と検討を通し，学問としての実践指導学を追究する教員の真摯で厳しい姿勢に，時に迷い，泣くことも多かったですが，講座の皆さんや教員とのディスカッションで，職域が違っても共有できる臨床の知に触れる討論に出会う瞬間は得難い経験であります。

私は，本講座に入学し，三年が過ぎようとしています。日々の心理臨床の中では，個人に敬意をはらいつつ，その人自身が生き抜いていく底力を援助したい，そしてそのような心理臨床実践家の養成について研究したいと思い，入学を決意いたしました。教員や学友の揺るがない目的と柔軟な姿勢に支えられ，私はHIV陽性者やセクシュアル・マイノリティの方たちとの心理臨床について研究をしております。彼らもそうですが，その心理臨床をしている臨床心理士に対してもある種のイメージが個性を凌駕してしまう現実があります。しかし，本講座の皆さんをはじめ，教育学研究科の院生や教員，そして，正木正先生が「教育臨床」という言葉を示し，教育という視座で，具体的問題に対し，実践的に，そして個人の問題で終わらず，人間についての問いになるよう高めていく本学の風土は，対象となるクライエントのみならず，院生としての私に対してもむけられ，それが今，私にとって一番の教育を享受していると強く感じています。

臨床教育学の院生と教員との合同のカンファレンスでも，心理臨床実践に取り組む院生の姿勢や，討論・コメントされる院生・教員の在り方も，実践指導学の現場と研究の交差する場となっています。本講座は，事務員や教員，院生と教育風土に支えられ，心理臨床とは何かという問いを追究していけるのだと感じております。残り少しの時間になりましたが，ひとりの人を大事にする心理臨床の在り方を研究していきたいと思います。

留学生から

自分についての整理と表現を土台に

教育学講座
修士課程1年
包　福升

10月5日、私は1人の作家に興味を惹かれました。それは、今年のノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロです。顔はアジア系で、同時にファッション・話し方・身振りはまるで英国の紳士。この人に、アイデンティティの悩みはあったのだろうか、また、周りの人々にどう見られてきたのだろうといった疑問が自ずと浮かんできました。

彼についてのインタビュー(UWTV 1995)を見て、やはり小さい時に常に自分が「来客(visitor)」であることを意識し、渡英初期の生活で「二つの言語の問題より、二種類の価値体系のことに強く影響された」と見ています。また、初めの2作が日本を舞台にした理由は、自分の「無意識」と関わっているのだと認識していました。そして、創作の主な関心は「人類共通(humanly universal)」だと語りました。

この「日本出身の英国人作家」(『日経新聞』10月6日)との「出会い」が、モンゴル族の出自を持ちながら、中国語の教育を受けた私に感銘を与えました。出身地の中国内蒙古自治区では、教育システムが概ね中国語とモンゴル語によって二分されています。半数近くのモンゴル族の家庭は、子どもの進路・社会からの影響などの要因で、子どもを中国語体制の学校に通わせ、従って私のような母語教育を受けたことがない人を大勢育ててきました。

イシグロの大ヒット作は3番目の小説『日の名残り』で、英国人バトラーを主人公とした作品だそうです。作品の拝読は今後にしますが、まず3番目ということは興味深いのではないでしょうか。最初の2作を通して、彼は自分自身についてよく整理し、表現することができたからこそ、3作目において才能をさらに大きく発揮できたと考えます。

今の私は、教育史の視点から内蒙古自治区の教育を研究しています。それはまさに自分自身についての整理と表現だと感じています。母語を失う少数民族の人々は、ひょっとしたら一生涯アイデンティティの欠如を抱きつつ、生きていかなければならないのです。研究のプロセスを経て、母語を失う少数民族の人々にも役に立つ成果を出したいと考えます。

附属臨床教育実践研究センターから

臨床教育実践研究センターの活動

附属臨床教育実践研究センター 特定助教　千葉 友里香

今年で開設21年目となる臨床教育実践研究センターは、開設以来一貫して、市民に開かれた心理教育相談室での心理臨床実践を中心に活動しています。心理臨床実践活動においては、スタッフ一人ひとりが目の前の来談者に真摯に向き合いながら、同時に、心理教育相談室という場のあり方についても細やかに考えながら、心理教育相談室での相談活動にあたっています。また、そうした臨床実践に根差した知を社会に還元する活動として、毎年「リカレント教育講座」と「公開講座」を開催しています。

今年度も8月に、第21回リカレント教育講座を開催いたしました。今年度は「家族の理解とその支援」をテーマとし、シンポジウムでは、家族心理学や学校現場での臨床活動に造詣の深い先生方をシンポジストに迎え、多角的な視点からお話しいただきました。当日は、学校教諭や臨床心理士など、約70名の方々にご参加いただき、活発な議論がなされました。

また9月より3カ月間、フライブルグカトリック大学のクリスティアン・レスラー先生に客員教授としてお越しいただき、ユング心理学に関する講義や臨床事例の検討、研究などの面で、ご指導をいただいています。11月には、「ユング心理学と今日の科学的知見―夢、元型、コンプレックス、そして心理療法の効果」と題した公開講座を開催する予定となっており、すでに大変多くの方から申込みを頂いています。

また、東日本大震災以降、当センターでは「こころの支援室」を開設し、震災に関連して関西圏に避難・移住されてきた子育て世帯への支援活動を継続して行っています。今年度は10月下旬に、農学研究科附属農場のご協力のもと、「京大農場ツアー～秋の実りを探して～」を開催する予定です。震災から時間が経つにつれ、参加者それぞれが抱えておられる困難の形も個別化してきている状況がありますが、これまでの参加者同士のつながり、スタッフとのつながりを大切にしながら、新たなつながりの輪を作っていく機会にしたいと考えています。

教育実践コラボレーション・センターから

コラボを通しての学校とのかかわり

比較教育政策学講座 准教授　服部 憲児

平成25（2013）年10月に着任後、右も左もよく分からないうちにコラボレーション・センター（以下「コラボ」）のメンバーとなりました。コラボ内外の様々な先生の研究やお考えに触れることができ、自分の視野が広がり、思考が深まることになり、たいへん幸運なことだったと思っています。コラボではE.FORUMの他、学校教育改善プロジェクトとして2つの事業に携わっています。

1つはSGHの指定を受けている福岡県立京都高校の支援です。これは本研究科として同校に協力しているもので、現地で高校生に研究の手ほどきをしたり、遠隔会議システムを活用して高校生に研究指導を行ったりしています。近隣に大学のない学校の支援のモデルケースを作ることを目指しています。もう1つは長崎市立池島小学校の支援です。テレビでも何度か取り上げられたことのある離島の小さな小学校です。校舎は千人以上収容することができる大きな学校ですが、現在、児童数は2名です（最盛期には千人以上が学んでいました）。校長先生は、「あなたがここにいるから」のテーマのもと、活き活きとした学校づくりを目指しています。この思いを叶えるべく、また今は島を離れている卒業生の思い出を残すべく、学校の整備や活性化に協力をしています。

これらの活動の特徴として、そこに教育機能を組み込んでいることがあげられます。学校に対して一方的に支援するだけではなく、実践を通して学生・院生が学ぶ機会を提供してもらっています。前者においては院生が高校生に研究指導を行っています。将来、教員になった時、あるいは他の仕事に就いたいとしても、この指導経験はいかされると思います。後者においては、普段は都市部で学んでいる学生たちが全く状況の異なる学校で子どもたちに触れ合い、先生方に直に話を聞いたりしています。将来各方面で活躍するであろう学生たちが、早い段階で多様な教育現場を知ることは大きな意味があると思っています。

E.FORUMから

平成29年度「全国スクールリーダー育成研修」

教育方法学講座 教授　西岡 加名恵

E.FORUMでは、2017年8月18・19日に2日間にわたり研修を開催しました。当日は、北は北海道から南は鹿児島県まで計146名（1日目131名、2日目104名）の教職員や教育委員会関係者、学生などが参加してくださり、熱気あふれる会となりました。

1日目の午前から午後の前半には、分科会A「カリキュラム設計入門――パフォーマンス課題づくり」（西岡加名恵教授）、分科会B1「若い教師に伝えたい授業づくりの発想」（石井英真准教授）、分科会B2「カリキュラム・マネジメントとの向き合い方」（服部憲児准教授）を提供しました。午後の後半は、稲垣恭子研究科長の挨拶に続き、山名淳准教授の進行のもと、シンポジウム「グローバル化時代の市民形成」を行いました。「グローバル化と多文化共生」（関西大学・山ノ内裕子教授）、「世界市民・地球市民・宇宙市民」（矢野智司教授）、「国際交流・留学と市民育成」（南部広孝教授）と題したご報告をいただき、活発な議論が行われました。

2日目は、岩井八郎教授による講演「データから読むゼロ年代――縮小する日本らしさ」が行われました。また午後は、シンポジウム＆教科等別分科会において、「E.FORUMスタンダード（第1次案）」の改訂に向けた検討を進めました。「E.FORUMスタンダード（第1次案）」とは、データベース「E.FORUM　Online(EFO)」に蓄積されたデータなどを生かし、各教科の「本質的な問い」やパフォーマンス課題を提案しているものです。今年は、会員からご提供いただいた実践報告をまとめた『「スタンダード作り」基礎資料集（第2集）』を踏まえつつ、議論を深めました。

E.FORUMは、これからも実践に役立つ新たな知見と楽しくて元気の出る研修を提供していきます。引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

挨拶する稲垣恭子研究科長

シンポジウム登壇者の先生方
（左より山名准教授・山ノ内教授・南部教授・矢野教授）

講演する岩井八郎教授

熱心に聞き入る参加者の皆さん

教科等別分科会の様子

教科等別分科会の様子

トピックス

大学院教育学研究科教育学環専攻の誕生

副研究科長　楠見　孝

平成30年4月から教育学研究科の組織は大きく変わります。これまでの2専攻（教育科学専攻と臨床教育学専攻）は、発展的に解消・統合し「教育学環（キョウイクガク カン）専攻」1専攻となります。これは，日本で唯一の専攻名です。その英語名称は、Interdisciplinary studies in Educationです。つまり，「環」は，図1に示すように，教育学の各専門領域と学内外の組織や実社会が円環状に結びつく学際研究を意味しています。この改組に伴い，図2のように，教員は，5講座に，大学院生は，平成30年度修士入学者・博士入学者（進学者含む）から各講座の下にある9つの専門コース（博士後期課程のみの1コース含む）に所属します。このことによって，学部教育との連続性をもつ形で，各専門領域を土台として，幅広い視点を持つ連環性・柔軟性，そして先端性のある研究・教育体制といたします。

また，従来の「専修コース」と「研究者養成コース」は次のように変わります。「専修コース」は，社会人経験が2年以上あることを入学資格とする「教育実践指導者養成プログラム」（修士課程）となり，その目的を明確化します。一方，「研究者養成コース」は「研究者養成プログラム」として，修士課程を修了後、進学により博士後期課程において学ぶことを視野に入れることが可能です。さらに、臨床教育学専攻「臨床実践指導者養成コース」（博士後期課程）は、「臨床実践指導者養成プログラム」になります。

教育学環専攻には，専門領域を超えたコース共通の授業科目や各コースにおいて体系づけられた高度専門科目が設置されます。研究者養成プログラムでは，修士1年次における必修科目「教育科学基盤演習」（前期），「学際総合教育科学」（後期）を通して，学際的・先端的な教育研究のためのスキルや知識を身につけます。また，「教育実践指導者養成プログラム」では，必修科目「教育実践指導基礎理論I,II」を通して，学校などにおける研究開発のスクール・リーダーとして中核を担っていく力量の基礎を身につけます。さらに，博士後期課程では，本年度設置されたグローバル教育展開オフィスが中心となり，新たな授業科目「国際インターンシップ」「国際フィールドワーク」「国際合同授業」を，海外の教育研究機関と連携して進めます。

このように，京都大学大学院教育学研究科教育学環専攻は，教育に関わる新しい学問領域を創出しうる教育・研究拠点を目指しています。

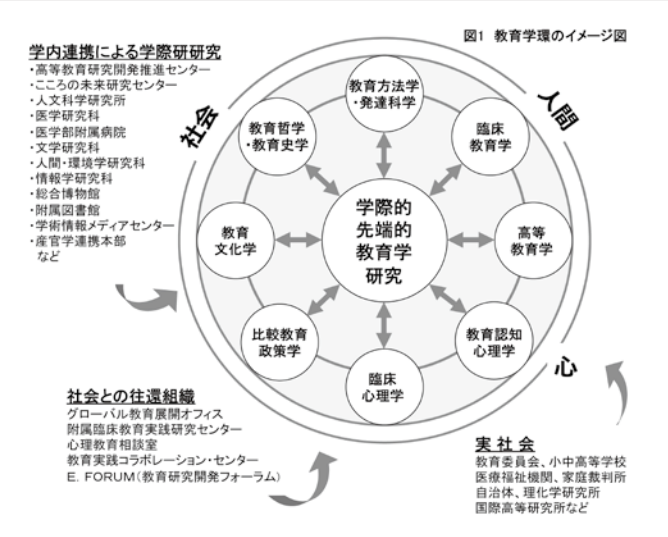

図1　教育学環のイメージ図

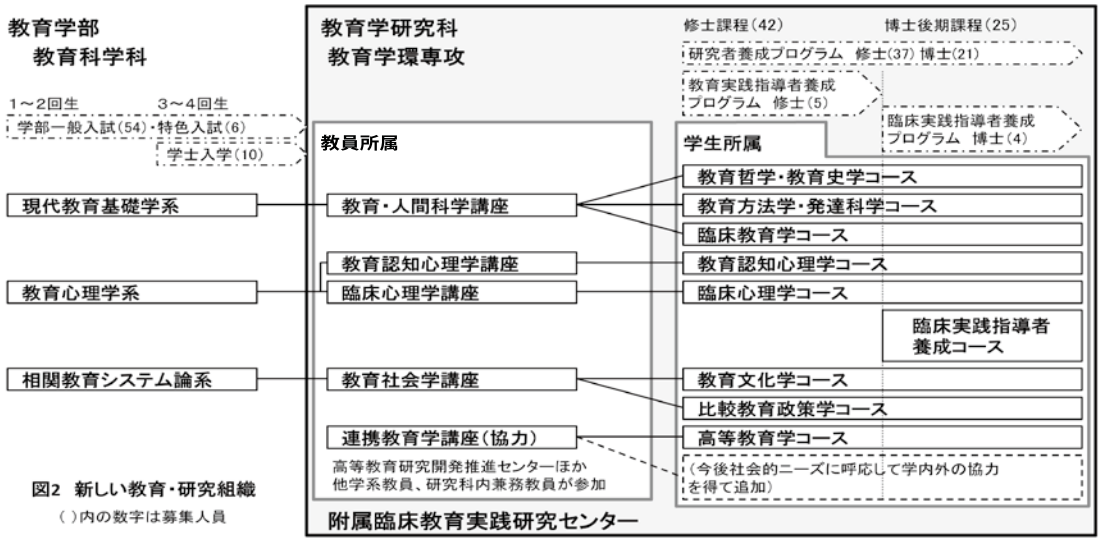

図2　新しい教育・研究組織
（ ）内の数字は募集人員

トピックス

教育学研究科・教育学部における公認心理師養成について

臨床心理実践学講座 准教授　松下 姫歌

本年9月15日に公認心理師法がついに全面施行されました。公認心理師は心理専門職に関する我が国初の国家資格であり、第一回の国家資格試験は平成30年中に予定されています。受験資格は、平成30年度の学部新入生（法施行後の学部入学生）からは、省令で定められた学部の必要科目25科目を履修し、学部を卒業することが必要です。その後は、大学院の必要科目10科目を履修し修了するコースと、それに相当するプログラムをもつ機関での実務経験を2年以上（標準的には3年以上）かけて必要な条件を充たすコースがあります。また、法施行前の入学者については、経過措置として、大学院の必要科目のうち定められた範囲の科目を履修し修了した者、学部の必要科目のうち定められた範囲の科目を履修し卒業した後に、プログラムをもつ機関での実務経験を経た者、既に現場で心理臨床活動を5年以上おこなっている現任者のうち現任者講習会を受講した者、などの特例措置が与えられています。

京都大学における公認心理師養成については、法施行前より、教育学研究科・教育学部、人間・環境学研究科・総合人間学部、文学研究科・文学部、こころの未来研究センター、霊長類研究所からの委員からなる、公認心理師カリキュラム検討委員会を発足し、岡野憲一郎委員長、楠見孝副委員長の下、公認心理師資格取得が可能なカリキュラムと学内体制を鋭意準備しております。学部科目については、教育・総合人間・文の各学部で従来から開講している、基礎を踏まえつつも高度な専門性を備えた科目を中心に準備を進めています。また、大学院については、教育学研究科は、長きにわたって臨床心理学および心理専門職の学問的専門性の高度化についてわが国をリードする役割を果たしてきました。関連学会や臨床心理士資格、臨床心理士養成大学院の指定校制度の創設に深く携わり、臨床心理士の養成だけでなく、当領域の研究者と臨床心理士の指導者をも養成しており、特に、研究者養成と指導者養成の博士後期課程を併せ持つ、国内で唯一の大学院でもあります。引き続き、臨床心理士および当該領域の研究者・指導者の養成をおこなう中で、公認心理師養成をおこないます。

学部教育においても、大学院においても、単に資格をとるためのカリキュラムではなく、学生にとって、京都大学および教育学研究科・教育学部がミッションとして掲げる高い研究教育目標に向け、自らの学問的探究とその心・人間・社会への具体的展開を促進しうることを目指しています。

若手研究者出版助成事業

教育学研究科では、京都大学総長裁量経費を得て、優秀な若手研究者による博士論文の出版助成事業を行っております。
本制度を利用して今年度は8件採択されましたので、ご紹介します。

氏　名	修了年月日・現職	タ　イ　ト　ル	出版社
田附 紘平	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了　平成29年3月修了 京都大学大学院教育学研究科　特定助教	クライエントの内的体験理解の鍵としてのアタッチメント理論の意義	京都大学学術出版会
工藤　瞳	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了　平成28年11月修了 青山学院大学　非常勤講師	ペルーにおける民衆教育の変容と学校での受容に関する研究	未定
大下 卓司	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了　平成28年7月修了	イギリスにおける数学教育改造運動の展開	東洋館出版社
千葉 友里香	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了　平成29年3月修了 京都大学大学院教育学研究科　臨床教育実践研究センター　特定助教	箱庭療法における作り手の心理的変容に関する研究 ーイメージと関係性の視点からー	未定
西尾 ゆう子	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了　平成29年3月修了 株式会社北大阪メンタルヘルス渡辺カウンセリングセンター　心理士	老年期の女性性に関する心理臨床的論考	誠信書房
山本 はるか	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了　平成28年3月修了 帝塚山学院大学教職実践研究センター　助教	現代米国における言語教育の理論と実践 ー文化的多様性を踏まえた学力保障の追求ー	京都大学学術出版会
畑野（大山） 牧子	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了　平成29年3月修了 大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部　助教	大学教育における教員の省察プロセスのモデル化に関する研究	東信堂、ナカニシヤ出版
時岡　良太	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程研究指導認定退学　平成27年3月修了 京都外国語大学学生相談室　カウンセラー 京都桂病院心理相談室　臨床心理士	心理臨床における「自分」に関する研究	未定

平成29年度教育学研究科長賞

学生表彰選考委員会委員長・研究科長　稲垣 恭子

このたび、平成29年度研究科長賞の選考の結果、教育認知心理学講座博士後期課程2年の柳岡開地氏が研究科長賞受賞者に選ばれました。誠におめでとうございます。

この賞は平成24年度に創設され、(1)学業、(2)課外活動、(3)社会活動などの分野で優れた成果を上げ本部局の名誉を高めた学生、(4)その他、本表彰に相応しいと認めた学生に対して賞を授与するものです。本研究科・学部の教職員および学生ならだれでも推薦することができます。6回目を迎えた今年度も推薦をお願いしたところ、締め切りの9月29日までに、研究科長賞に(1)学業分野で１名の推薦がありました。以下、選考経過と選考理由を簡単にご報告します。

まず、学生表彰選考委員会（委員は稲垣恭子研究科長、楠見孝副研究科長、矢野智司副研究科長、南部広孝教務委員長、明和政子学生委員長）で、推薦を受けた候補者について慎重に協議・検討しました。その結果、柳岡氏が受賞にふさわしい成果を有すると判断し、研究科長賞候補者として決定しました。

柳岡氏は、学部生の時から一貫して行動の柔軟性を可能にする認知機能とその発達について、幼児を対象とした心理学実験により検討してきました。その研究は、子どもの認知機能を探るためのユニークな実験課題の考察、詳細な理論的分析、完成度の高い研究報告によって特徴付けられています。この間、査読付き論文7編（うち単独および第一著者6編）、国際学会発表10回、国内学会発表13回、研究会・シンポジウムでの発表16回（うち招待3回）の報告を行っています。また、教育心理学分野において国内で最も伝統があり評価の高い城戸奨励賞に選出（2016年）され、ヨーロッパ発達心理学会の発表に対し、研究の質と将来性を評価され、EADP travel fellowshipを受賞（2017年）しました。さらに、卒業式での教育学部代表、発達支援センターにおける発達相談員ボランティア活動、海外大学への研究訪問等といった国内外での幅広い活動により、学業成果と学術活動が本研究科の名誉を高めることに大きく貢献しました。

柳岡氏が今回の受賞を機にさらなる精進につとめ、教育科学の発展に寄与・貢献されますようお祈りいたします。

研究科長賞

教育認知心理学講座
博士後期課程2年
柳岡 開地

この度は,研究科長賞という名誉ある賞を賜り,大変光栄に思います。

私が研究者を志すようになってから,多くの人に出会い,支えられてきました。この場をお借りして,私の研究を支えてくださっている方々を少しだけ紹介させてください。

まず,教育認知心理学講座の先生方や院生の皆様との闊達な議論,そしてユニット事務の方々のサポートが私の研究を支えています。講座内では,私のように発達心理学を志している人は多くありませんが,そういった環境だからこそ自分の研究を別の角度から捉え発展させてゆける機会が多くあったのだと感じています。

次に,いつも調査や観察を快く引き受けてくださる幼稚園・保育園の先生方,そして調査や遊びに付き合ってくれる子どもたちなくして私の研究は成り立ちません。実に,1年の4分の1を幼稚園・保育園で過ごしており,先生のお話を伺ったり,子どもと関わったりする中で毎日様々な発見があるので大学に帰ることをつい忘れそうになってしまいます。

他にも国内外の先生方,リーディング大学院デザイン学の方々などいままで支えて下さった皆様には心より御礼申し上げます。今回の受賞を励みに,今後も皆様に良いご報告ができるよう研究活動に邁進したいと思います。この度は本当にありがとうございました。

オープンキャンパス2017

平成29年8月9日（水）、10日（木）の両日、「京都大学オープンキャンパス2017」が開催された。

本学部においては、8月10日（木）12時30分から実施し、455名の参加者があった。

当日は、稲垣恭子学部長による歓迎のあいさつ後、佐藤卓己教授、森口佑介准教授による模擬授業、各系の説明と質疑応答、併せて、岩井八郎教授による特色入試の説明が行われた。また、13時から16時まで、学生相談員が個別相談にあたり、高校生からの相談に親身に応じていた。

参加者は熱心に耳を傾けており、本年も盛況を収めた。

大学院・学部学士入学 入試説明会

平成29年6月17日（土）京都大学吉田キャンパスにおいて、平成29年7月8日（土）京都大学東京オフィス（丸の内）において大学院及び学部学士入学入試説明会が開催された。

吉田キャンパスでは、14時から南部広孝教務委員長による歓迎のあいさつの後、入試ガイダンスが行われ、大学院学生による個別相談が実施された。

東京オフィスでは、14時から南部広孝教務委員長による歓迎のあいさつの後、西平直教授によるオープニングレクチャー「他者理解と異文化理解」、入試ガイダンス及び個別相談が実施された。

いずれの会場でも、受験希望者が熱意を持って参加していた。

事務室から

激動期の中で

総務掛長　靭　尚子

平成29年4月に総務掛に配置換となり、最初の山場が大学院の組織改組（従来の2専攻から「教育学環（キョウイクガク　カン）専攻」への改組）についての申請書類を取りまとめて文部科学省に提出することでした。大学院の新設に比べると提出書類は省略されているとはいえ、執行部の先生方や事務部・大学事務局の担当掛との協議に要したメールや打合せ・書類作成に費やされた時間は、申請期限までの約1か月間だけでも膨大なものです。

その直後に行った学際教育学研究拠点「グローバル教育展開オフィス」の整備に係る概算要求では、学内・学外の関係者との度重なる調整の結果、文部科学省の概算要求事項として財務省に要求されました。

異動直後で行き届かない点が多々あったと思いますが、辛抱強くご教示いただいた研究科の先生、眞継事務長を始め事務部の皆様には心より感謝申し上げます。

稲垣研究科長が、前号の巻頭言で「組織再編とともにカリキュラムや大学入試の方法も大きく変わる予定である。研究科にとっては大学院重点化以来の大きな改革になる。」と記されていましたが、今年度はまさに激動期なのでしょう。総務掛だけでなく、カリキュラムを担当する教職教務掛、大学院入試を担当する教務掛など、事務部一同、先生方と一緒に改組に向けて取り組んでいます。

過去のニューズレターを見ていると、2012年頃にも京都大学や研究科の動向にも「激動」といった記載が見られ、先生方がいかにご苦労されたか偲ばれます。

今年度指定国立大学法人に指定された本学では「わが国の人文社会科学を牽引する役割」が期待されています。教育学研究科の動向が更に注目される中、事務部としていかに研究科の教育研究活動を支援し、教員・学生サービスの更なる充実・改善に貢献していくことができるか、形式にこだわることなく取り組んでいきたいと思います。

図書室から

選書 楽しいけれど難しい

図書掛長　飯田 智子

図書館員の楽しい仕事の一つに選書があります。といっても、大学図書館の場合、誰が選書を行うかは機関によって様々です。図書館員にも選書権限があるところ、学生選書ツアーを実施するところ、教員が中心となって選書を行うところ。教育学部図書室は、京都大学の中では図書館員が関わる割合が大きい方だと感じています。

選書にあたっては、出版カタログやチラシ、書店ウェブサイトの新着情報、関連雑誌の書評などを参考にします。限られた予算の中で、主に学生の学習・研究に役立つ資料を効率的にバランスよく揃えることは、研究者ではない私たちにとって気が張る作業です。ですので、そうして選んだ図書が実際に借り出されるのを見ると、ホッとして嬉しく思います。しかし、情報を集めやすく価格も安い和書はともかくとして、洋書の選書には悪戦苦闘しています。図書室では長く利用することを目的としてハードカバー版を購入することが多いため、どうしても1冊が高額になり、慎重に選書をせざるを得ません。その結果、例年和書に比べて洋書の新刊購入がやや弱い傾向にあったことから、今年度は各講座の先生方に依頼をし、専門家の目で図書室に所蔵すべき基本・重要文献を選定していただきました。順次購入していく予定です。

当室では教育学研究科の学生からの購入希望も受け付けています。図書室に所蔵していないもので、必要かつ蔵書としてふさわしい図書があれば、この制度を利用して申請してください。申込内容を検討の上、購入の可否を決定します。また、これら新着資料はKULINEから一覧できます。検索窓の下にある「新着案内」から、調べたい図書館室名を選んでください。当室では新着図書を別置しませんので、動向をつかむにはここをチェックしていただくとよいでしょう。

さすが京大と言われる蔵書構成を維持できるよう、自身のスキルを磨くとともに、先生方からの暖かいご支援（寄贈）もお待ちしています。

諸記録

おもな出来事（H29.4.1-10.31）

4月	27日（木）	教育実践コラボレーション・センター 第21回知的コラボの会「京都大学が京都にある理由ー都市と高等教育ー」 （教育学部本館）
5月	8日（月）	滋賀県立膳所高等学校 特別授業「評価方法からカリキュラムを考えるー教育方法学入門ー」
	23日（火）	高大連携：SGH課題研究セミナー （対象：福岡県立京都高等学校1年生）
6月	9日（金）	Yuko Munakata教授講演会「Developing Inhibitory Control」 （総合研究2号館）
	9日（金）	高大連携：高校生向け特別授業「実習を通して学ぶ臨床心理学」 （対象：滋賀県立膳所高等学校生）
	23日（金）	Randall C. O'Reilly教授講演会 「The Emergence of Symbolic Cognition from Sensory-Motor Dynamics」 （教育学部本館）
	30日（金）	Natalia Suárez Fernández先生講演会 「DESIGNING HOMEWORK TO ACHIEVE BETTER LEARNING OUTCOMES IN COMPULSORY EDUCATIONー義務教育で学習成果を上げる宿題のデザインー」 （教育学部本館）
7月	1日（土）	吉川邦夫氏講演会「NHKの連続ドラマを考えるー制作と受容の視点からー」 （教育学部本館）
8月	18日（金）、19日（土）	教育実践コラボレーション・センター E.FORUM 全国スクールリーダー育成研修 （国際高等教育院棟）
	20日（日）	附属臨床教育実践研究センター 第21回リカレント教育講座「『心の教育』を考えるー家族の理解とその支援ー」 （百周年時計台記念館）
10月		教育実践コラボレーション・センター E.FORUM 学力評価スペシャリスト研修 （教育学部本館）

人事異動（H29.5.1-H29.10.31）

平成29年5月1日付け

小松　光	研究員（臨床教育学）	採用
西川　一二	研究員（教育認知心理学）	採用
	技術補佐員（教育方法学）	採用

平成29年5月16日付け

市川　千秋	研究員（地域連携教育研究推進ユニット）	採用

平成29年5月31日付け

	事務補佐員（教育社会学）	任期満了

平成29年6月1日

LERTLADALUCK, Kanda	外国人共同研究者	受入
	技術補佐員（教育方法学）	採用
	事務補佐員（教育社会学）	採用
	派遣職員（教育方法学）	採用

平成29年6月6日

	派遣職員（教育方法学）	採用

平成29年7月31日付け

	技術補佐員（教育社会学）	退職
MUNAKATA, Yuko	招へい外国人学者	受入終了

平成29年9月1日

SHIN, JUNG-Cheol	招へい外国人学者	受入

平成29年9月30日付

山名　淳	准教授（教育学）	退職

平成29年10月1日

広瀬　悠三	准教授（教育学）	採用
	技術補佐員（教育方法学）	採用
	事務補佐員（教育方法学）	採用

平成29年10月31日

	事務補佐員（教育方法学）	任期満了
	技術補佐員（教育方法学）	任期満了

外部資金受入れ（H29年度）

◎共同研究

研究題目	委託者	担当者
心的状態の制御が生理・知覚・認知・情動機能に与える影響についての研究	日本電信電話株式会社	野村　理朗
画像処理にもとづくMachine-Readableなレシピ表現言語の開発	クックパッド株式会社	橋本　敦史

◎受託事業

研究題目	委託者	担当者
平成29年度教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業「学力評価スペシャリスト研修プログラムの開発・施行・改善」	文部科学省	稲垣　恭子

◎寄付金

研究題目	寄付者	担当者
母親の授乳経験が感情知覚・認知に与える影響	公益財団法人前川財団	明和　政子

教育学研究科・教育学部基金（詳細はP14）

ご寄付いただきました方々への感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。（公開をご希望されない方については、掲載しておりません。）

ベイカー　浩子　　森本　洋介　　廣瀬　直哉

（五十音順）　　平成29年11月30日現在

新任教員・事務職員紹介

広瀬 悠三

准教授

人間の変容と形成過程を、地理性や道徳性、宗教性を考慮に入れながら、哲学的に研究しています。どうぞよろしくお願いいたします。

所　属　教育学講座
専　門　教育哲学、教育人間学

掛員

10月1日付で教務掛に配置換となり、久しぶりに学生窓口の現場に戻ってまいりました。どうぞよろしくお願いいたします。

所属掛　教務掛

教育学研究科・教育学部基金

ー未来の教育を創造するため、人間・社会についての世界最先端の研究を展開し、成果の社会還元を行うとともに、学生の教育環境の整備に取り組みますー

本研究科・学部は、1949年の創設以来、世界最先端の教育学研究とその研究者の養成、ならびに全学の教職教育の責任部局という責務を担いながら、これまで各界で活躍する有為な人材を輩出し、優れた研究成果を現場に還元することで社会の要請に応えてきました。

本研究科・学部は、学校教育はもとより、地域、家庭、職場など人が育っていくあらゆる場面を「人間形成」の場として探究しています。その中で、不登校・学習意欲不振生徒のための学校改善、過疎地域の地域振興などへの提言、教育委員会の指導主事など第一線の実践現場で働く人びとにとっての研修の機会を提供しておりますが、このような活動は、大学院生が現場のリアルな問題に触れながら自らの研究関心と手法を研ぎすますための教育の場でもあります。

近年、社会と連携したこうした教育研究活動の必要性が増す状況において、本研究科・学部が社会と連携しながら実践的な教育・研究を行うためには、安定した財政基盤が必要です。その礎の一つとして、2015年に「教育学研究科・教育学部基金」を設立しました。本基金では、研究の成果を現場（フィールド）に返し、また現場での課題を教育・研究に生かしていく、「理論と実践の往還型」の教育・研究という本研究科・学部の特色ある活動を維持するため、以下の活動に活用します。

基金の使途：

項　目	具体例
（1）教育支援	・学生のための図書・教材等の購入 ・学生関係居室の整備・維持管理 ・障害学生等のための学習補助者の雇用 ・学生・院生の海外派遣　など
（2）研究支援	・研究活動基盤整備の支援 ・研究・学術資料の整備 ・公開講座・講演会等の開催　など
（3）その他事業支援	・京都大学教育学研究科シリーズ本の出版補助 ・修了生・卒業生との連携活動　など

詳細は以下のとおり
http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/education/index.html

編集後記

今はもう死語となったが、明治初期まで後記のことを「跋（ばつ）」とも呼んだ。「罰」や「×」を連想させる聞こえは悪いが、由来はむしろ前向きである。というのも、足が「犮（とられ）」てつまづくという意味があると同時に、とられた足を「犮（ぬ）」いて踏み出すという意味もある。後者の意味が転じて、文章の本質をより抜く役割を果たす後記に繋がる。躓（つまづ）いて、踏み出し、本質に迫る「跋」。その一文字に学問のエッセンスが凝縮されていると考えるのは、職業病なのかな。（NvS）

京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会

委員長　桑原　知子 教授　（心理臨床学講座）
委　員　稲垣　恭子 教授　（教育学研究科長・教育学部長）
委　員　佐藤　卓己 教授　（生涯教育学講座）
委　員　VAN STEENPAAL, Niels 准教授（教育学講座）
委　員　眞継　芳春 事務長
委　員　靭　　尚子 総務掛長
委　員　辻　　幸代 教務掛長

事務担当
教育学研究科・教育学部総務掛
TEL 075（753）3000
ホームページ http://www.educ.kyoto-u.ac.jp